

研究

大学人のための大学論

—「国立大学法人」の法則—

モンスター教育

(1)「モンスター」とは？

北海道教育大学教授
宮下英明 著

国立大学法人化の法則

モンスター教育

(1) 「モンスター」とは？

本書について

2008-03-13

本書は、

<http://justice.iwa.hokkyodai.ac.jp/>

のサイトで 2008 年 3 月 1 日～ 13 日の間に書き上げたシリーズ

『[モンスター教育](#)』

を PDF 文書の形に改めたものです。

2008-11-25

『モンスター教育』を (1), (2) に分冊。

2010-05-28

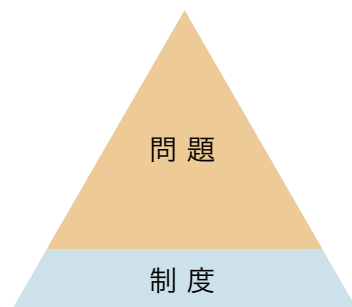
サーバを変更 (m-ac.jp)。

文中の青色文字列は、ウェブページへのリンクであることを示しています。

「モンスター教育」全体の序

作成：2008-03-13 更新：2008-03-13

世の中の出来事に問題を見るとき、ひとは問題の根底に〈制度〉を描く
図を描く：



問題解決を「制度改革」と定め、制度変更に進む。

制度変更は、決して問題の解決にはならず、それどころか、却ってより
ひどい問題を引き起こす。

「改革」は中止され、「改革」の後遺症の手当のステージへと進む。

なぜ「制度改革」は失敗し、よりひどい問題を引き起こすことになるの
か？

——間違いから出発しているからである。

間違いとは？

——〈問題を制度の上に載せる図〉である。

制度は、複雑系の一つの均衡（その都度の均衡）を表している。

制度は、複雑系の表出である。

一方、問題も複雑系の表出である。

「構造」の考え方ができれば簡単にわかるように、制度（複雑系の一表出）
をいじって問題（複雑系の一表出）を解決するという発想は倒錯である。

制度を変えるとどうなるか？

均衡を壊された複雑系は、改めて均衡づくりをする。

その均衡は、結局、もとの制度（旧制度）である。

新制度は、「偽りの制度」になる。

この「偽りの制度」が、複雑系の均衡づくりを邪魔する。

そして、よりひどい問題を引き起こす。

問題を制度の上に載せる間違っただけの図を描く者はだれか？

基本的に、行政である。

そして、行政が号令を発すると、〈お上意識〉がこれに共振して、間違っ
ただけの図を信奉する集団心理が社会に起こる。（「改革」バブル）

ここに二つの〈間違っただけの図〉が重なった興味深い現象がある。

二つの〈間違っただけの図〉とは、

「ゆとり教育」（本質は、体系バラバラ主義）

「国立大学の法人化」

であり、これが重なった現象とは、国立大学が「法人化」の一環として
行った課程再編である。

体系バラバラ主義が学校教育を損なう様が、「モンスター」の発生。

体系バラバラ主義が国立大学の教育を損なう様は、「モンスター」の素
通り（モンスター学生 → モンスター社会人）。——教員養成課程であ
れば、モンスター教員の生産になる。

本論考は、この内容を論ずる。
全体構成は、つぎのようになる：

(1) 「モンスター」とは？

- § 「モンスター」の意味
- § 大人がモンスターに変身する時代
- § 子どもがモンスターとして放任される時代
- § モンスター大学生
- § モンスター教員

(2) 学校教員養成課程

- § モンスター教員養成課程
- § 体系バラバラ主義
- § GPA 制度, CAP 制
- § 「教員免許更新講習」

(1) では、「モンスター」の概念を考察する。今日の「勉強しない大学生」「本を読まない大学生」をとらえるスキームの考察を兼ねたので、若干話を横に逸らしている感があるが、参考になるところもあると思うので、付き合いただけならと思う。

そして、(2) で、学校教員養成課程の話に入っていく。
なお、「教員免許更新講習」は、付録として取り上げた。

本論考の目的：「モンスター教育」

作成：2008-03-01 更新：2008-03-01

本論考は、つぎの二重の意味で、「モンスター教育」を主題化する：

- 「モンスター学生を相手にする教育」
- 「モンスターをそのままにする / つくってしまう教育」

註：常識・社会通念が通用しない人間を指すことばに、これまで「新人類」とか「バカ〇〇」があった。ここでは、「モンスター」を用いることにする。理由は：

- 「新人類」には、「これからはこうなる——認めよう」のトーンが感じられてしまう。
- 「バカ〇〇」は表現としていささかきつい（実際、マスコミは「理不尽な〇〇」を使うようになっている）し、ものごとを相対的に観る視点を失っている。
- 「理不尽な親」は英語では「モンスター・ペアレント」となるが、「モンスター」なら相対性の視点を失う感じがしない。

モンスターの社会現象化は、「教育がモンスターの大発生を許した」という問題になり、またこの意味で「教育がモンスターをつくった」という問題になる。

目次

0. はじめに	1
0.1 はじめに——「モンスター教育」を主題化する理由	2
1. 「モンスター」の意味	5
1.1 「モンスター」の時代	6
1.1.1 世の中モンスターだらけ?	7
1.2 「モンスター」の意味	9
1.2.1 「モンスター」の意味	10
1.2.2 「モンスター」2タイプ:「子ども」と「変身」	11
1.2.3 「モンスター」の基準:自足性	12
1.2.4 「教養」の意義	13
2. 大人がモンスターに変身する時代	15
2.1 「モンスターに変身」の時代	16
2.1.1 <大事>が引っ込む	17
2.1.2 市場原理主義基調の「改革」	18
2.1.3 あら探しと、これに対するガード固め・過剰防衛	19
2.2 「モンスターに変身」の力学・構造・要因	21
2.2.1 根本に、商品経済の力学	22
2.2.2 マスコミが、モンスター・ロジックを発信	23
2.2.3 流行・迷信	24
3. 子どもがモンスターとして放任される時代	27
3.1 子ども=モンスター	28
3.1.1 「成長していない」を意味とする「モンスター」	29
3.1.2 「モンスター」形成は、成長期と関係している	31
3.2 子どもを子ども扱いしない社会風潮	32
3.2.1 子どもを子ども扱いしない学校・社会	33
3.2.2 子どもは傷つくのが商売	34

3.2.3 モンスターが「顧客」「人権」で守られる	35
3.2.4 マスコミ=人権擁護モンスター	36
3.3 モンスターを産出する教育理論	37
3.3.1 「子どもの主体性を尊重」	38
3.3.2 体系バラバラ主義	39
3.4 ピント外れの教育行政	42
3.4.1 猫の目行政——その理由	43
3.4.2 中教審はどうしてあんなふう?	45
3.5 活字離れの時代風潮	46
3.5.1 活字離れがモンスターの生態	47
3.5.2 「読書」の意義——古今東西に自分を広げる	48
4. モンスター大学生	51
4.1 状況「モンスター大学生」	52
4.2 モンスター大学生の症状	53
4.3 モンスター大学生に対する教育の困難	57
5. モンスター教員	61
5.1 モンスター教員	62
5.1.1 教員の不勉強——自分の<いま・ここ>に自足	63
5.1.2 「問題教員」とモンスター教員の関係	66
5.1.3 モンスター教員は増加する	67
5.2 教科教育で教員はモンスターになる	68
5.2.1 自分の<いま・ここ>で授業設計	69
5.2.2 例:算数・数学の授業	70
結語	74

0. はじめに

0.1 はじめに

——「モンスター教育」を主題化する理由

本文イラスト，ページレイアウト，表紙デザイン：著者

0.1 はじめに — 「モンスター教育」を主題化する理由

作成：2008-03-05 更新：2008-03-05

教育は、複雑系相手である。

複雑系の一部を全体だと思ってそれをいじると、思わぬところに影響し、教育のアウトプットをおかしくしてしまう。

教育行政や教育のムーブメントは、たいていこんなことの繰り返しである。——失敗して担当者が退場する。新しい担当者に入れ替わり、ただ180°ひっくり返したようなことを始める。

こんな調子で、いつまでたっても「相手は複雑系」を学ぶことがない。

教育の課題として、

「探求をベースにする」

「学習にゆとりを」

は至極もったもなものである。

しかし、これを教育ムーブメントにすると、大きな落とし穴が待っている。

「ゆとり教育」はこんなふうには失敗し、「近い将来にモンスター大発生」をアウトプットするだけの結果で終わった。

しかし、「ゆとり教育」の失敗は、「学力低下」という形で総括されてしまう。そして「学力を低下させる教育」をひっくり返した「学力を向上させる教育」が、新しいムーブメントになる。

このつぎは、どうなるか？

10年から20年後、「学力向上」の謂う「学力」は本当の学力か？を言うことが流行りになる。「探求をベースにする」「学習にゆとりを」が唱

えられ、「ゆとり教育」のムーブメントになる。

教育学は、このような振り子運動から降りることを主題にしなければならない。

それは、教育を「複雑系相手」のものとして研究することである。

「教育においてこんなふうな一部のいじり方をすると、こんな顛末になる」を明らかにしていくことである。

このような立場から、本論者は、つぎの問題を考える：

「教育においてどんなふうな一部のいじり方をすると、
モンスターをつくることになるか？」

1. 「モンスター」の意味

1.1 「モンスター」の時代

1.2 「モンスター」の意味

1.1 「モンスター」の時代

1.1.1 世の中モンスターだらけ？

1.1.1 世の中モンスターだらけ？

作成：2008-03-10 更新：2008-03-11

「今時の若い者は」が言われるのはいつものこと。

では、「モンスター・ペアレント」や「本を読まない大学生」も、「今時の若い者は」の一つか？

「今時の若い者は」のことばが出てくる理由には、二通りある：

A. 自分が変化して、外部の見え様が違ってきた。

若者は変わっていないが、自分の眼には「今時の若い者は」になる。

B. 時代は振り子運動する。

別の向きに振れた時期に成長した若者が、「今時の若い者は」と言われるものになる。

Bの「今時の若い者は」は、「新人類」とも呼ばれる。

「モンスター」は、この「新人類」が否定的ニュアンスで使われていることばとしてよい。

「問題〇〇」というものもあるが、これは「モンスター」とは区別する。

なぜなら、「問題〇〇」には<普遍的>確率現象（「どうしても一定割合で起こるもの」）のニュアンスがあるが、「モンスター」は「ある一般的でない環境で成長したことの結果」というものであり、<条件的>である。

「モンスター」における

「時代の振り子運動が別の向きに振れた時期に成長」

「ある一般的でない環境で成長」

とは、「社会性がきちんと教育されない時代 / 環境に成長」のことである。「モンスター」とは、社会性がきちんと教育されなかった「子どものまんま」のこと。

例えば、「本を読まない大学生」は、本を読むことが教育されなかった・本を読まないことが教育的にチェックされなかったことの結果である。

「社会性がきちんと教育されない環境で成長」の起こる場所・期間が広がれば、モンスターの発生となり、局所的であれば、モンスターの局所的発生となる。

では、現在のモンスター発生状況はどうか？

「本を読まない大学生」を見れば、モンスターはここしばらく増えていると言ってよい。——「モンスターだらけ」とまで言うてよいかどうかは、実際に調査してみなければわからない。

1.2 「モンスター」の意味

1.2.1 「モンスター」の意味

1.2.2 「モンスター」 2タイプ：「子ども」と「変身」

1.2.3 「モンスター」の基準：自足性

1.2.4 「教養」の意義

1.2.1 「モンスター」の意味

作成: 2008-11-18 更新: 2008-11-18

「モンスター」とは、異常なロジックで人に対してくる者のことを謂う。「ロジックの異様」が、「モンスター」の意味の要点である。「モンスター」の意味を考えることは、「ロジックの異様」の意味を考えることと重なる。

人がものごとを考えるときは、考えの中にいろいろなことが要素として入ってくる。そしてこれらが統合されて、一つの考えが作られる。「ロジックの異様」は、肝心な要素が抜けているとか、要素の統合ができていないこと（統合失調）の現象である。

「ロジックの異様」を言い表すのに、「常識がない」という表現が使われる。「常識」は、「理屈の統合」の人類史が現在に至っている形である。「常識」は社会的なことがらであり、個人が独自に到達できるものではない。

「常識」は、教育によって仕込まれる。

そこで、「モンスター」の話は「教育の失敗」の話にも転じていく。

1.2.2 「モンスター」2タイプ:「子ども」と「変身」作成:

2008-11-18 更新: 2008-11-18

「モンスター」とは、異常なロジックで人に対してくる者のことを謂う。「ロジックの異様」は、肝心な要素が抜けているとか、要素の統合ができていないこと（統合失調）の現象である。

「ロジックの異様」では、つぎの2つが一応区別される:

A. 子どものまま

「子ども」とは「ロジックの学習途上」のこと。

したがって、「子どものまま」は「ロジックの異様」のことになる。

(→ § 子どもがモンスターとして放任される時代)

B. ロジックを異様に使う者へと変身

「考えが変わった」「人が変わってしまった」は、よくある話。

(→ § 大人がモンスターに変身する時代)

1.2.3 「Monster」の基準：自足性

作成：2008-03-03 更新：2008-03-03

「社会成員として問題のある者」がそのまま「Monster」なのではない。「Monster」の基準 (criteria) は何か？と問うとき、「自足」が挙げられる。

たとえば、「子ども」であること自体は「Monster」ではないが、「子どものまんま」は「Monster」である。

「子ども」とは、〈いま・ここ〉において外界への拡がりがない者のことを謂う。

「子どものまんま」とは、〈いま・ここ〉において外界へ拡がる契機 (モーメント) を内に持たない者のことを謂う。

「子ども」が能力を指すことばであるのに対し、「子どものまんま」は傾向性を指す。

「子ども」に対しては教育が成り立つ。

「子どものまんま」に対しては、教育は通常形では成り立たない。

Monsterの「自足」には、つぎの二通りがある：

- A. 「これは問題である」という意識がもたれない。
- B. 「問題であっても構わない (自分はこれに対策しない)」を通す。

どちらがより重症ということは言えない。

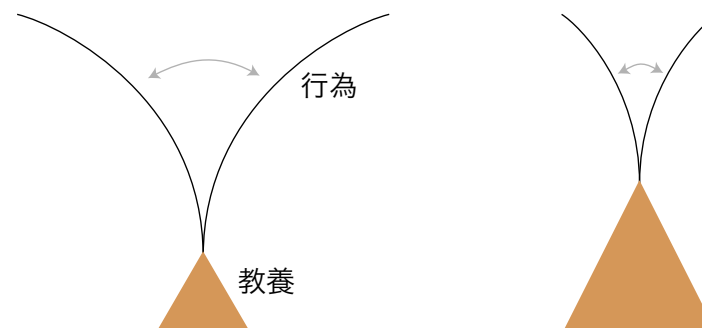
A, B それぞれに、異なる難しさ (対応の難しさ, 治療・教育の難しさ) がある。

1.2.4 「教養」の意義

作成：2008-03-10 更新：2008-03-10

「教養」の意義は、「Monster」と関連させるとよくわかる。実際、「Monster」は、教養欠損の症状である。

つぎは、教養のイメージ：



教養の大きさが、行為の逸脱 (自由度) を小さくする。(「教養が邪魔する」とは、このことを謂う。)

逸脱の大きいことが「Monster」と表現されるわけであるが、これは教養の乏しさに対応している。

そこで特に、「Monster」と「子ども」は同義、となるわけである。ちなみに、「子どもは創造的だ！」を言う者は、「Monster」を「創造的」と取り違えていることになる。

「創造的」とは、教養があってなおかつ自由度を大きく保つことができている様子を謂う。——これが構造的に難しいことであるので、「創造的」は評価される。

2. 大人がモンスターに変身する時代

2.1 「モンスターに変身」の時代

2.2 「モンスターに変身」の力学・構造・要因

2.1 「モンスターに変身」の時代

1.2.1 <大事>が引っ込む

2.1.2 市場原理主義基調の「改革」

2.1.3 あら探すと、 これに対するガード固め・過剰防衛

2.1.1 <大事>が引っ込む

作成：2008-11-18 更新：2008-11-18

「モンスターに変身」では、「<大事>が引っ込む」という現象が起こっている。

「<大事>が引っ込む」にはいろいろな様相があるが、基本はつぎの2つである：

A. なりふりかまわず（「四の五の言ってられない」）

B. <大事>がアタリマエ化していて、この意味に気づかない / これの意味を忘れる。

そして、大事がスッポリ抜けたロジックを操るようになるとき、その者はこのことによって「モンスター」になっている。

2.1.2 市場原理主義基調の「改革」

作成：2008-11-18 更新：2008-11-18

市場原理主義基調の「改革」の時代には、「<大事>が引っ込む」 (§2.1.1) が起こる：

- A. 市場原理を見て、なりふりかまわず（「四の五の言ってもらえない」）になる。
- B. 「改革」に浮かれてしまい、<大事>の大事さがわからなくなる。

2.1.3 あら探しと、これに対するガード固め・過剰防衛

作成：2008-11-18 更新：2008-11-18

市場原理主義基調の「改革」の時代は、顧客主義とコンプライアンスの時代である。

顧客は、自分の不具合・不満足を、ものごとのバランスを無視して、訴えることができる。

この訴えは、マスコミによって、そのまま受け入れられる。

そして、マスコミによる、訴えられた者のつるし上げが始まる。

マスコミがこのような役に就くのは、マスコミがもともと「モンスター」であるからだ。（§2.2.2 マスコミが、モンスター・ロジックを発信）

つるし上げられる立場になったらたいへんなので、みながガード固め・過剰防衛に走る。

ある商品の一つに異物が入っていたら、その商品すべての回収が開始される。万・十万単位の数の回収が、「異常」とされない。（断っておくが、これは「狂気」の集団心理である。）

また、責任担当部署は、何か事件が起こる度に、下部に注意を通達する。これは、「注意」の様式化という現象である。

グーグルマップを使って、自分用マップを作ることができる。ただし、非公開を設定しなければならない。このことを知らなく

て設定しなかったため、自分用マップがインターネット上公開になってしまうケースが報告されている。そして、またいつものごとく、「個人情報保護」好きのマスコミが、これを大々的に取り上げる。

これを見た文科省は国立大学に注意喚起の通達を発し、各国立大学は内部にこの通達をおろす。

おそらくつぎは、いまニュースになっている「大学生大麻汚染」を受けて、これの注意喚起の通達がくるのだろう。——ところで、大学生が大麻栽培で逮捕されるとその大学の長が謝罪会見をすることについて、だれも不思議と思わない。どこもかしこも思考停止が蔓延といった体(てい)である。

「モンスター」は、社会全体がこうなっているという話なのである。

なお、「あら探し・防衛」の様式化の話は「欺瞞性」の話にもなるが、論点を拡散させないために、「欺瞞性」については踏み込まないことにする。

2.2 「モンスターに変身」の力学・構造・要因

2.2.1 根本に、商品経済の力学

2.2.2 マスコミが、モンスター・ロジックを発信

2.2.3 流行・迷信

2.2.1 根本に、商品経済の力学

作成：2008-11-19 更新：2008-11-19

われわれは、商品経済社会に生きる。

商品経済は、複雑系である。

複雑系であるが、「利益」「効率」「コスト」といった、目立って見えるものがある。

この目立って見えるものがすべてだと思ってロジックを立てるとき、このロジックはモンスター・ロジックになる。

例：「金を儲けて、何が悪いんですか!？」

2.2.2 マスコミが、モンスター・ロジックを発信

作成：2008-11-19 更新：2008-11-19

複雑系を単純に扱うロジックは、モンスター・ロジックになる。

マスコミは、限られたスペースにストーリーを押し込むことを、仕事の形にする。

複雑系を単純に扱うものになり、このことで、モンスター・ロジックを発信するものになる。(よい・わるいの問題ではなく、構造的な問題。)

マスコミの発信するモンスター・ロジックに倣えば、これはモンスターである。

「一億総白痴化」(大宅壮一, 1957) のことばは、この視点からも考えてみるとよい。

2.2.3 流行・迷信

作成：2008-11-19 更新：2008-11-19

人は、流行に弱い。

警戒していても、流行に嵌ってしまう。

いま流行りの言説を、信じてしまう。

これを、自分に適用する。

的外れな適用をしてしまうとき、その者はモンスターになる。

実際、その適用のロジックが、モンスター・ロジックである。

例：国立大学は、「法人化」において、米国流企業経営の言説の信奉者になる。

競争 / 評価 / 報奨主義を信じ、顧客主義を信じ、実質より広報を信じ、ベンチャーとか「地域連携」とかを信じる。

気持は「文明開化」であり、従来型を恥じて捨てる。

従来の「国立大学」観に照らせば、これは「モンスター」である。

そしてモンスターの教育はモンスターをつくる。（『[モンスター教育 \(2\) — 教員養成課程](#)』）

3. 子どもがモンスターとして 放任される時代

3.1 子ども＝モンスター

3.2 子どもを子ども扱いしない社会風潮

3.3 モンスターを産出する教育理論

3.4 ピント外れの教育行政

3.5 活字離れの時代風潮

3.1 子ども=モンスター

3.1.1 「成長していない」を意味とする「モンスター」

3.1.2 「モンスター」形成は、成長期と関係している

3.1.1 「成長していない」を意味とする「モンスター」

作成：2008-03-01 更新：2008-03-01

カブトムシに「ここでは自分勝手に動き回ってはならない」と教えることはできない。「教える」という行為の形が、この場合考えようがない。(実際、想像してみるとよい。)

カブトムシがモンスターであるからだ。

人間の赤ん坊も、生まれてしばらくはこのカブトムシと同じである。

その後時間が経つ毎に、モンスターの度合いがマシになっていく。

ただし、「マシになっていく」というだけ。

カラダが大きくなる・イコール・モンスターでなくなる、ではない。

現に、「ここでは自分勝手に動き回ってはならない」の類のことが通じないモンスター人間が増えてきて、社会問題化している。

「教える」が成り立つためには、教える者と教えられる者が一定の共通基盤の上に乗っていないなければならない。カブトムシに教えることができないのは、この共通基盤というものが立たないからだ。

この共通基盤の成り立たない存在のことを「モンスター」と謂う。

「モンスター」は、カラダ格好には現れない。

ひとは、「自分と同じカラダ格好の者は自分と同じ」と錯覚する。そして、相手に対し「教える」がぜんぜん通じないことを見出して、びっくりする。(カブトムシなら、カラダ格好でモンスターとわかるので、「教える」が通じなくてもびっくりしないし、そもそも「教える」を試みない。)

「教える」が成り立つための共通基盤とは何か？

「常識」「教養」「知識」「専門性」といったことばで言い表しているくもるもろのこと>である。

——途方もなく膨大なものであって、「もろもろのことである」というようにしか言えない。(言えないが、しかしカラダは了解できる。)

モンスターをモンスターたらしめているものは、「常識」「教養」「知識」「専門性」といったことばで言い表しているくもるもろのこと>の欠如である。

そして、「モンスターでない者も一方にいる」という事実は、つぎのことを示唆する：

くもるもろのこと>の獲得の機会を失したことが、
いまモンスターでいる原因・理由である。

3.1.2 「モンスター」形成は、成長期と関係している

作成：2008-03-03 更新：2008-03-03

「モンスター」形成は、成長期と深く関係している
すなわち、「子ども」のときに「子どものまんま」が形成されてしまった者の場合、大人の年齢になってこれを壊すのは極めて困難になる。
また、大人の年齢の者は自立した者と見なされるので、外からの教育の働きかけもなくなる。「子どものまんま」が放ったらかしにされるわけなので、「子どものまんま」が固まるばかりとなる。

よって、学校教育は重要である。

特に、学校教育が「子ども」を「子どものまんま」にしてしまう教育理論に主導された場合、モンスターが大発生することになる。

(§3.3 モンスターを産出する教育理論)

3.2 子どもを子ども扱いしない社会風潮

3.2.1 子どもを子ども扱いしない学校・社会

3.2.2 子どもは傷つくのが商売

3.2.3 モンスターが「顧客」「人権」で守られる

3.2.4 マスコミ=人権擁護モンスター

3.2.1 子どもを子ども扱いしない学校・社会

作成：2008-03-03 更新：2008-03-03

「モンスター」とは、「子どものまんま」で自足している者のことである。「子どものまんま」で自足できたのは、環境がこれを許すようなものであったからである。

子どもは本来、大人への依頼心を強くもち、自分の無力感を強くもつ。教育はこれを利用する。

子どもに「自分はひどく未熟であり勉強しなければならない者である」という思いを強く持たせ、勉強を課す。

子どもは「自分はひどく未熟であり勉強しなければならない者である」と思っているので、課された勉強をする。

ここに、子どもを子ども扱いしない教育論や社会風潮が起こる。子どもの好きにさせる、周りはこれをサポート・サービスする、間違っただけをしても叱らない・罰しない。

このようにしない者は、社会から叩かれる。

こうして、子どもは早くから<大人>と対等な存在にされる。

「自分はひどく未熟であり勉強しなければならない者である」という思いがもたれないので、勉強をしない。実際、「勉強しなくてもよい」になる。

<大人>にされてしまった子どもは、「子どものまんま」で大人の年齢になる。モンスタリーの出来上がりである。

3.2.2 子どもは傷つくのが商売

作成：2008-03-03 更新：2008-03-03

子どもが傷つくことは悪いことか？

成長にとって必要なことである。

成長には、大きくなると強くなるがある。

食べて大きくなる。

傷ついて強くなる。

実際、知ったかぶりの人権派がつまらぬことで「子どもが傷ついた」を問題にしている間に、子どもはずっと多くのことで「ひどく傷つく」をやっている。

子どもを叱ることは、子どもを傷つけることである。

傷づけることが必要だから傷つける。

これをく叱る>という。

「傷つけずに叱る」は、論理矛盾である。

3.2.3 モンスターが「顧客」「人権」で守られる

作成：2008-03-11 更新：2008-03-11

商売では、<子どものまんま>の者も顧客である。

顧客は、「すべてよし」の存在。

<子どものまんま>の者も、すべてよしである。

<子どものまんま>の者は自分がよしとされるので、<子どものまんま>を続ける。

子どもは子ども扱いされるのではなく、顧客扱いされる。

子どもの顧客扱いは、「子ども扱い」の今日の形になっていく。

昔の子ども扱いは、顧客扱いではないので、いまは人権侵害になる。

特に、子どもを叱る者は、人権侵害の廉(かど)で、他から叱られたり罰せられる。——例えば、今日、教員は生徒を叱れない。

そして、子どもの顧客扱いのドライブに、「少子化」が加わる。

例えば大学は、<子どものまんま>受験生に選ばれる大学になれるよう「改革」する。<子どものまんま>学生への各種サービスを、自分のところの売りにする。

こうして、<子どものまんま>は、大学も素通りする。

3.2.4 マスコミ＝人権擁護モンスター

作成：2008-03-03 更新：2008-03-03

自分の子どもが学校で叱られて「なんでうちの子どもを叱るんだ！」と学校に文句を言ってくる親を、モンスター・ペアレントと謂う。モンスター・ペアレントを問題にするとき、いちばんのモンスターはマスコミである。

「モンスター・ペアレント」が新聞記事になったりするが、「よく言うよ」という感じである。

学校や教育委員会は、モンスター・ペアレントにもマスコミにも、毅然とできない。学校や教育委員会は、子どもを叱った教員に「子どもの前であやまれ」を指示する。

<叱る>は、きれいな形にはならない。

ダメ出しが<叱る>の基本形である。

ダメ出しは、相手の全否定。

「なにやってんだ、おまえはバカか、死ね」が<叱る>の基本形になる。

いま、これをやるとマスコミにやられるようだが、学校は毅然としてこれができないからならない。

「豆腐の角に頭をぶつけて死ね」という叱りことばがあるが、これを言ったらきっと、「豆腐の角に頭をぶつけて」の箇所が削除されて報道されるのだろう。

3.3 モンスターを産出する教育理論

3.3.1 「子どもの主体性を尊重」

3.3.2 体系バラバラ主義

2.2.1 「子どもの主体性を尊重」

作成：2008-03-01 更新：2008-03-01

教育では「主体性尊重」の概念は重要である。

それは、「個の多様性」という哲学 / 世界認識に拠っている。

「個の多様性」の尊重は、特個性の尊重であり、そしてそれは主体性尊重になる。

しかし、教育現場で「主体性尊重」が「子どもの主体性を尊重」に転じられると、だいたいがひじょうにおかしいことになる。

すなわち、教育現場で「子どもの主体性を尊重」がやられると、それは「子どものままにする」になる。そしてこの教育の結果は、モンスターの発生。

「子どもの主体性を尊重」を戴く教育現場では、つぎのような授業案のフォームが流行りになる：

左コラムに「生徒の活動」を書き、
右コラムに「教師の支援」を書く。

子どものアタマのやることは、いくらがんばっても<児戯>である。

子どもは、自分のアタマをどんなにいっしょうけんめい働かせても、大人にはなれない。もし大人になれるというなら、「**個体成長は、その中で<人類史における成果の蓄積>を実現する**」になってしまう。

教育は、「**人類の遺産を子どもに伝える**」という方法で、子どもを大人にする。子どもは、このショートカットによって、一挙に原始人から現代人になれる。

2.2.2 体系バラバラ主義

作成：2008-03-02 更新：2008-03-02

学校教育論には体系主義のものと体系バラバラ主義のものがあって、両者の勢力関係によって、学校教育のシステムや内容が振り子のように行ったり来たりする。

最近の例では、「ゆとり教育」は体系バラバラ主義である。

体系バラバラ主義は、つぎのような形で現れる：

- ・ 実用・実証主義
- ・ 合科主義
- ・ コア・カリキュラム
- ・ 基礎学習コース
- ・ 生活単元
- ・ 総合学習
- ・ 体系バラバラ的問題解決学習
- ・ 体験学習
- ・ インターンシップ
- ・ 地域フィールドワーク
- ・ ボランティア

体系バラバラ主義が国の教育方針としてトップダウンで教育現場に降りてくると、教育現場はどうなるか？

「何をしてもよいかわからない」になる。

よそで何をやっているか見回したり、手探りでなにかかにかやってみる。で、ひどくつまらないことを、ダラダラやってしまう。

これに子どもが付き合わされる。
大人への成長は起こらず、子どものまんま。
モンスターの大量発生。

体系バラバラ主義を唱えたり、トップダウンで降ろす者は、体系バラバラの確たる方法を自ら持っているわけではない。自分が笛を吹けば、みんなが上手に踊り出すと思っている。

この期待は、見事に外れる。
そして、モンスターの大量発生を非難されて、彼らは舞台から降りる。

彼らは舞台上に上りそして降りただけだが、この間、モンスターが大量につくられる。
モンスターにされた子どもについては、不条理だが、運が悪かったということだけで済ませるしかない。
たまたま戦争の時代に子どもの時を過ごすことになった不幸と同型である。

体系バラバラ主義の何が問題かと言うと、教育を簡単に考え過ぎることである。あるいは、教育をわかっていないということである。
翻って、勉強というものをよくわかっていない者が、体系バラバラ主義にとびつく。体系的な学問で自ら鍛錬した者は、つまみ食いみたいな形ではなく成長が起こらないことをよく知っているのだから、決して体系バラバラ主義にはとびつかない。

中には、つぎの考えから確信犯的に体系バラバラをとる教育者も存在する：

「みながみな勉強について行けるわけではない」
「できない子どもにも授業を何か意味あるものにしてあげなくてはいけない」

しかしこのような者は、ケース・バイ・ケースで体系バラバラを考える。学校教育全体を体系バラバラ主義で主導するという考えはもたない。

体系バラバラ主義は、学校現場が何をやってよいかわからずそしてつまらないことをやるだけになるので、モンスターの大量発生を導く。——このように述べてきた。

しかし、これは事の一面に過ぎない。核心はつぎの方にある：

体系の学習が＜成長＞を実現する。
ところが、体系バラバラ主義は、体系の学習を軽んじる風潮をつくる。
学校で生徒は体系の学習から離れるようになり、＜成長＞機会を自ら捨て、モンスターになる。

3.4 ピント外れの教育行政

3.4.1 猫の目行政——その理由

3.4.2 中教審はどうしてあんなふう？

3.4.1 猫の目行政——その理由

作成：2008-03-08 更新：2008-03-08

教育行政は、猫の目行政である。——行政全般が、猫の目行政である。これは、批判してもしょうがない。

行政は猫の目行政だと割り切って、上手に対応することが肝心である。特に、敏感・過剰に反応することは、厳禁である。

行政は、なぜ猫の目行政になるか？

問題を、根柢的に考えることをしないからである。

すなわち、「問題を構造化し、主と従の関係を特定する」という科学の方法論を持たないからである。

行政は、問題の〈現象〉を、問題そのものと定める。

この現象を消すこと（すなわち、消しゴムづくり）を、問題解決と定める。

現象には、そのもとになるものがある。これを、「問題の本質」という。本質には手をつけずただ現象を消そうとしても、それは問題を余計複雑にしてしまうだけになる。

行政は、つねにこれをやる。

当然失敗し、またつぎの「問題解決」を打ち出す。

これが「猫の目行政」である。

行政は、「問題を根柢的に考える」という方法（科学・哲学の方法）をとらない／とれないために、「猫の目行政」になる。

これは端的に、「行政と科学・哲学は、相性が悪い」という問題である。

実際、「問題を根柢的に考える」という方法をとれないのは、国の政治に限ったことではない。「法人化」の国立大学が、よい例である。科学・哲学を十八番とする国立大学でも、行政は科学・哲学と別物である。会議にもし科学・哲学が入ってくれば、空気は一気に白けてしまうだろう。

3.4.2 中教審はどうしてあんなふう？

作成：2008-03-03 更新：2008-03-03

勉強は、良質な学習内容を相手に、じっくりやるしかない。
成長は、じっくり時間をかけるしかない。
アタリマエのことをアタリマエにするだけ。
遅々とした成長にイライラし、近道捜しにフラフラするというのが、いちばんダメ。

このダメなことをいちばんやっているのが、中教審。
学校教育のシステムをいじっては、教育全体をおかしくする。
失敗して退場。
新人が登場して、180° ひっくり返したことを提言
こんな具合に、手当のつもりの変な絆創膏が重ね貼りされ、教育がますますいびつになる。

それなのに、登場してくるときは、すごい＜権威＞面を見せる。
——「振り子の反復運動をやって失敗退場する」役回りに過ぎないのに。

ただ静かにしてほしいのだが、当人たちは「いっぱい色々なことを出さなければ仕事をしていないと見られる」とでも思っているかのよう
に、いっぱい色々なことを出してくる。
そして、このいっぱいの色々なことに、教育現場が翻弄される。

3.5 活字離れの時代風潮

3.5.1 活字離れがモンスターの生態

3.5.2 「読書」の意義——古今東西に自分を拡げる

3.5.1 活字離れがモンスターの生態

作成：2008-03-01 更新：2008-03-01

「モンスター」とは、「子どものまんま」ということである。

子どもから大人に変わる機会をもたなかった / もてなかった / もとうとしなかったために、子どものノンカテゴリーカルな特性をそのまま保ってしまうことになった。

「子どものまんま」の逆は「自分の殻を絶えず壊し外に拡がる」。

翻って、「自分の殻を絶えず壊し外に拡がる」をしなければ、モンスターになる。

ひとの生活空間は狭い。この狭い空間に閉じこもっていながら、「自分の殻を絶えず壊し外に拡がる」なんてことができるのか？

できるのである。それが「読書」である。

(§3.5.2 「読書」の意義——古今東西に自分を拡げる)

読書は、他の方法で代替できるか？

できない。

「大人」の要件に「思考できる」があるが、思考鍛錬のメディアは「本」である。

よって、活字離れが生活スタイルになった時代には、「思考」を知らないモンスターが大発生する。

3.5.2 「読書」の意義——古今東西に自分を拓げる

作成：2008-03-01 更新：2008-03-01

子どもから大人に変わるとは、自分の殻を絶えず壊し外に拓がっていくことである。翻って、子どものままとは、〈いま・ここ〉にずっと留まっていること。

〈いま・ここ〉を出て外に拓がるときの空間には、時間的な空間と地理的な空間がある。この二つを合わせて「古今東西」と謂う。

自分の〈いま・ここ〉から〈古今東西〉に拓がる方法は？

最も手近でありしかも最も効率的・効果的な方法が、読書。

図書館に行くとか、本屋に行くとかすればよい。

ただし、肝心なことは、自分にとって難しい本、読書が「げんこつでアタマをガツンと殴られる」みたいになるような本、すなわち、大人の本を選び、これにチャレンジすること。

自分にやさしい本を求めるとするのはダメ。

自分にやさしい本とは、子どもの自分にやさしい本ということであるから、「児童書」である。児童書は、「子どものままでいいんだよ」と読者を慰撫するだけ。

4. モンスター大学生

4.1 情況「モンスター大学生」

4.2 モンスター大学生の症状

4.3 モンスター大学生に対する教育の困難

4.1 情況「モンスター大学生」

作成：2008-03-02 更新：2008-03-02

ここしばらく「勉強しない大学生」「本を読まない大学生」が言われてきた。

実際には、彼らは「勉強しない・本を読まない」ではなく、勉強の勝手がわからない・読書の勝手がわからない者たちである。——この意味で、「勉強できない・本を読めない」。

同様に彼らは、「思考の勝手がわからない」の意味で、思考できない。

勉強・読書・思考は、「学生」——とりわけ「大学生」——の必要条件（「学生 / 大学生」の概念の含意）である。よって、勉強・読書・思考ができない学生 / 大学生は、「学生」ではない学生、「大学生」ではない大学生である。

ここでは、この意味で「モンスター学生」「モンスター大学生」の表現を用いることにする。

モンスター大学生の大発生は、「少子化による大学全入」が原因ではない。すなわち、「以前なら大学生になるはずのない者が大学生になり、それらがモンスターだ」ではない。

「モンスター大学生」は、全体傾向である。

高校以下で「モンスター学生」の大発生が起こっていて、それが大学に入って「モンスター大学生」になるということである。

4.2 モンスター大学生の症状

作成：2008-03-08 更新：2008-03-08

「モンスター」は、程度の凄さを言い表すことばである。質的な違いを表すものではない。——「モンスター」に対する「非モンスター」があるわけではない。

「モンスター大学生」の「モンスター」は、ここでは、大学生の条件である「勉強・読書・思考」を欠く程度の凄さを言い表すのに用いている。よって、社会問題として言われる「学力の低い大学生」と同じ意味である。特に、「モンスター大学生」の症状は、「低学力」の発現の形に他ならない。

「学力」とは、文字通り「学ぶ力」のことである。

この力のある・なし（高い・低い）は、学ぶ行為ができるかどうかで測る。

「学ぶ行為ができる」とは、学ぶ行為をパフォーマンスできてしかも一応の結果を出せるということである。

そして、「学ぶ行為」とは、勉強・読書・思考といったものである。

モンスターは、自分の「低学力」症状を意識しない——すなわち、自分が特別拙いことになっているというようには思わない。

また、モンスターの「低学力」症状は、ことばで言って直るものではない。

以下、「モンスター大学生」の症状の領域の押さえとして、「低学力」の発現の形を簡単に押さえしておく。

(1) 自学習できない

- 自学習の場・時間・体勢を、自らつぐれない。

- 自学習しなければ試験で不合格になり、科目を落とすことがわかっていても、自学習できない。

(2) 読書しない・できない

- 本を読んでいないことが、気にならない。
読んでいない本のあることが、気にならない。
- 図書館に行かない。本屋に行かない。
- 教科書(指定図書)、参考書を買わない。
- 読書を課されても、読書しようとししない。
- 難しい本に向かわない。難しい本と向き合えない。

(3) 文章をつくれな

- 質問に対する答えが、文にならない。
- レポートが、書き方も内容も幼稚。

(4) 受講が意味をもたない

- 授業を受ける体勢をつくれな。 (私語など)
- 授業を受ける形がわからな。 (聞き流し)

(5) 課題研究ができません

- しない・できなで済ませようとする
 - ・ 課されていることを、しないで済ませようとする。
やっいていなくても、それで済ませる。
 - ・ 課されていることをしないで済ます方法はないか?と考える。
近道はないか?と考える。
- 課されていることとは、別のことをする (量的に同じにすればごまかせる、と思う)。

- ・ 必要量を満たしていなくても、それで済ませる。

○ 指導されても、改まらない (改善できな)。

- ・ ダメ出しの意味がわからな。
- ・ 論理の間違いを指摘されても、(論理が身に付いていないので) 間違いがわからな。
- ・ 「地に足を着けて」「腰を据えて」ができません。
一歩一歩地道に進む、ということができな。
(てきとうに形がつけば、それでくできた>とする。簡単に形にならないときは、放り出してやめる。)

○ 「レポート / 論文作成」が何をすることなのか、わからな

- ・ たまたま目についたテキストを拾ってきて、適当な量を並べて、それで終わりにする。
(論理的に構成するのではなく、ただ集めて並べる。)

○ レポート / 論文をつくれな

- ・ ストーリーの論理的構成ができません。
- ・ 内容が幼稚で、論理もめちゃくちゃ。
- ・ レポート / 論文の「完成度」の概念をもたない / もてない。
レポートの再提出を課されても、同じものしかできな (改善できな)。
レポート作成にじっくり取り組むことができな (簡単に書いて終える、推敲しない)。
- ・ 推敲を課されても、推敲できません。

(6) 授業欠席

- 好き勝手に欠席する。特に、無断欠席する。
- 出欠席を自己管理できない。
 - ・ 欠席数オーバーで科目を落とすことがわかっているにもかかわらず、欠席する。

4.3 モンスター大学生に対する教育の困難

作成：2008-03-02 更新：2008-03-02

モンスター大学生は、勉強の勝手がわからない・読書の勝手がわからない・思考の勝手がわからない。

モンスター大学生が憐れなのは、「子どものアタマでいくらがんばっても、やることは<児戯>」然となること。そして、ダメ出しされてもなぜダメなのかがわからないので、改善できない。

解説：例えば「その論理は変だろう」と教員が指摘する。学生は論理が身につけていないので、変であることがわからない。

これは程度問題で、学者にもあたりまえにある。しかし、モンスター大学生の「モンスター」たる所以は、この論理欠損の程度がすごいということである。これまで通用していた「その論理は変だろう」が、彼らには通じない。

こういうわけで、大学の授業が根底のところでは成立しなくなる。卒業論文を課しているところは、たいへんである。

レポート作成をネット検索・ページコピーでやってしまうという問題も、報告されている。

これも「モンスター」の一表出である。

レポート作成と結びつけるべき「自己伸張」の思想を欠くので、レポート作成を<見た目づくり>にして、これでよしとする。

あわせて、「レポート作成の勝手がわからない」がある。

探求的な検索はしない。自分が簡単に形にできそうなものをさがす。単

4. モンスター大学生

なる、ピックアップである。形をさがして内容を考えない。

そして考えるときは、自分の〈子どものアタマ〉に戻り、そこで考える。

結果は、〈児戯〉。

これらは、言われて改まるというものではない。

カラダのものであるから、時間のかかるカラダづくりになる。

5. モンスター教員

5.1 モンスター教員

5.2 教科教育で教員はモンスターになる

5.1 モンスター教員

5.1.1 教員の不勉強——自分の<いま・ここ>に自足

5.1.2 「問題教員」とモンスター教員の関係

5.1.3 モンスター教員は増加する

5.1.1 教員の不勉強——自分の<いま・ここ>に自足

作成：2008-03-08 更新：2008-03-08

「モンスター・ペアレント」の「モンスター」の意味は、

「常識外れの度合いがすごい

——当人はこれに自足している」。

学校教員の場合、教員資格取得および教員採用のシステムがあるので、この種のモンスターは一応考慮の外においてよい。

学校教員の場合の「モンスター」は、

「能力が低く、しかも不勉強の度合いがすごい

——当人はこれに自足している」

である。以下は、この意味の「モンスター教員」について論じる。

「当人はこれに自足」には、つぎの二通りがある (§1.2.3 「モンスター」の基準：自足性)：

A. 「これは問題である」という意識がもたれない。

B. 「問題であっても構わない(自分はこれに対策しない)」を通す。

「モンスター教員」にも、この二種類がある。

A の場合：

学校教員の不勉強は、大学の教員養成課程の学生のときから続いているものである。

教員養成課程学生は、「授業」を

「自分が子どものときに教えられたものを、

今度は自分がいまの子どもの子どもに教える(=伝える)」

というふうを考える。

——よって、つぎのようになる：

「勉強する必要のあることは、教える内容ではなく、教え方（指導法）である」

「教員養成課程は、指導法をやってくれればいいのであって、役に立たない専門科目はやめて欲しい」

「専門科目に付き合っているのは、単位を取ることが規則だから」

そしてこの意識は、つぎのものが風土となっている大学では、壊されることがない：

「何でも合格」

トコロテン方式順送り（『モンスター教育(2)』§1.2.1）

体系バラバラ主義（『モンスター教育(2)』§2）

B の場合：

つぎのような時代に成長期を過ごした者は、このBタイプになる：

なんでもかんでも（特に、「不勉強」も）「個性・主体性」にしてしまい、そして、この「個性・主体性」の尊重を唱える。

「不勉強も個性・主体性」の教育を受けてきて教員養成課程の学生になった者は、つぎのような考え方をする：

「不勉強の教員が世の中にもいい」

（＝「不勉強の教員だからこそ、子どもにとってよい教師だということがある」）

この＜倒錯＞を自分の中でずっと持ち堪えるのはけっこうたいへんそうに思えるが、テレビドラマがやっているように、学校ストーリーの中で正規授業のシーンを1%くらいに小さくしてしまえば、これができる。

Bタイプ教員養成課程学生モンスターは、このような学校ストーリーで自分を保たせているわけである。

5.1.2 「問題教員」とモンスター教員の関係

作成：2008-03-03 更新：2008-03-03

「問題教員」と「モンスター教員」は、包含関係にある。
すなわち、モンスター教員は「問題教員」の一つのタイプ。

「問題教員」の「問題」には、能力的なもの、性癖的なもの、思想的なもの、
といろいろ考えられるが、モンスター教員は

「子どものまんま（自分のくいま・ここ）に自足」
が問題になる場合である。

「問題教員」に対する指導方法は言って聞かせるであり、自分自身の相
対化を促すようなことを言って聞かせる。

ところが、モンスター教員には、この種の言葉が通じない。
言って聞かせるが使えないので、ひじょうにやっかいな存在になる。

5.1.3 モンスター教員は増加する

作成：2008-03-08 更新：2008-03-08

「子どもが子ども扱いされない時代には、子どもは大人になってモンス
ターになる。

子どもが子ども扱いされない時代はここずっと続いていて、実際、モン
スターが社会問題になっている。

公教育では、子どもに対する子ども扱いの程度が『学習指導要領』によっ
て定められるようになっている。

直近のことでは、「ゆとり教育」で、「子どもを子ども扱いしない」方の
極に針が振り切った。

「科目の選択性」も、「子どもを子ども扱いしない」側のものである。

子どもを子ども扱いしない時代はずっと続いてきており、またこの傾向
は今後も続くので、モンスターは増加の一途を辿る。

そして、モンスターの増加は、モンスター教員の増加を含意する。

5.2 教科教育で教員はモンスターになる

5.2.1 自分の<いま・ここ>で授業設計

5.2.2 例：算数・数学の授業

5.2.1 自分の<いま・ここ>で授業設計

作成：2008-03-03 更新：2008-03-03

教員は、(教科にもよるが)教科の内容に関する自分の専門性を高める勉強には、概して不熱心である。

彼らが勉強しないのは、

「生徒に授業する内容なら、専門的な勉強は必要ない」

と思っているからである。そして、

「授業内容程度なら、自分は知っている」

わけであるから、

「授業づくりは、自分のいまのアタマで十分」

となる。

授業をつくる時彼らが目を通す本は、生徒が使う教科書。

これは、彼らが生徒と同じアタマで授業をつくっているということである。

このように、教員は自分の<いま・ここ>に自足する。

——すなわち、モンスターになる。

5.2.2 例：算数・数学の授業

作成：2008-03-07 更新：2008-03-07

<子どものまんま>で自足している者が「モンスター」。
この意味で、算数・数学の授業において教員はモンスターである。

算数・数学は、モンスターがこれを行うことにより、ひどいものになる。
しかし、モンスターは「自足する者」であるから、授業がひどいことになっているという意識はない。

わかりやすく、小学算数で話をしよう。
算数の問題を解ける者は、算数をわかっていると思い、教員の場合だとさらに、算数を生徒に教えられと思う。
その者は、「算数を勉強しなければならない」とは思わない。

算数を授業する教員のアタマの中の算数は、小学生の算数と何も変わっていない。
教員は、<小学生のアタマのまんま>で授業をしている。
小学生が小学生に授業をしているということである。

教員のアタマが<小学生のアタマのまんま>であることは、「何 (what)・なぜ (why)？」の形の問いを投げかけてみればわかる。例えば、
「かけ算とは何？」
「ここでかけ算が使われるのはなぜ？」
「何・なぜ？」の問いに、教員は「????」になる。

教員はどうして「自分は算数をわかっている」と思うのか？

「いかに (how)？」に答えられるからである。

「 12×34 の計算は？」

「いかに？」に答えられることを「できる」と謂う。
「何・なぜ？」に答えられることを「わかる」と謂う。
教員は、算数ができるが、わからない。

しかし、教員は「自分はわかっていない」を意識しない。
算数に「何・なぜ？」の問いがあることを知らないからである。
「知らぬが仏」というわけだ。

10年目研修で算数・数学を受けにきた小・中学校教員に、わたしは毎回「大学卒業後数学の勉強をしたことは？」とたずねるのだが、答えはいつも「ない」である。

彼らが数学を勉強しないのは、

「小・中学の数学を教えるのに、数学の勉強は必要ない」と思っているからである。そして、彼らはつぎのように思っている：

「自分は小・中学の数学を知っている」

「授業づくりは、自分のいまのアタマで十分」

授業をつくるとき彼らが目を通す本は、生徒が使う教科書。
徹頭徹尾、小・中学生のアタマで授業をつくっているわけである。

小学生に「算数の授業設計」を課したらどうなるか？
<見戯>になる。

算数理解での教員のアタマは、小学生のアタマと変わらない。
したがって、教員に「算数の授業設計」を課したら、<見戯>になる。

「何・なぜ？」の問いをもち、そしてこれに答えられるようになるには、
どうしたらよいか？——数学を勉強する。

「何・なぜ？」の問いと答えは、数学にある。

まとめよう。

教員は「いかに？」に答えられるので、算数をわかっていると思う。「何・
なぜ？」の問いがあることを知らないなので、この<自足>は壊されない。
したがって、<子どものまんま>で授業する。

教員が数学に向かうことがあるとすれば、それはつぎのときである：

1. 「何・なぜ？」の問いがあることを知り、
2. それに答えられない自分に気づき、
3. 「何・なぜ？」の答えは数学にあるということを知らされ、そして、
4. 「何・なぜ？に答えられないのは拙いか——数学をやるしかない
か」と思うようになる。

この4段階の最後まで進むことは、稀である。

——数学に向かう教員は稀である。

結語

作成：2008-03-13 更新：2008-03-13

歴史には、「＜軽薄＞と＜真面目＞の行ったり来たり」が運動の一つとしてある。

「改革」は＜軽薄＞のベクトルであり、「改革」に失敗し後遺症の手当に向かうのは＜真面目＞のベクトルである。

目的論的に言えば、系には、自分が停滞し・死なないうよう、「＜軽薄＞で壊しく真面目＞で修復」の運動が DNA にプログラムされている。

破壊はひどいものであり、破壊の時代にたまたま生を得た個体はかわいそうだが、種が生き残る形にはなっているということだ。

学校教育という系では、行政が「＜軽薄＞で壊す」の役をする。

行政は、構造的 / 宿命的に、「改革」のスイッチングを続けるところである。すなわち、＜軽薄＞のスイッチングをするのみである。

「＜軽薄＞で壊しく真面目＞で修復」の系の運動は、＜軽薄＞の度し難さという形で問題になる。

すなわち、＜軽薄＞のうちには、ほんとうに「たいがいにしる」と言いたくなるようなものがある。

モンスターをつくってきた / 今後もつくりそうな教育論は、この一つである。

本論者は、この趣旨から、学校教育に引き寄せて「モンスター」を主題化した。

(本論者は、[『モンスター教育 — \(2\) 学校教員養成課程』](#)に続く。)

宮下英明 (みやした ひであき)

1949年、北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て、現在、北海道教育大学教育学部教授。数学教育が専門。

註：本論考は、つぎのサイトで継続される（この進行に応じて本書を適宜更新する）：

<http://m-ac.jp/education/monster/>

— 国立大学法人化の法則 —

モンスター教育 —— (1) 「モンスター」とは？

2008-03-13 初版アップロード (サーバ: justice.iwa.hokkyodai.ac.jp)

2008-11-25 分冊・内容追加

2010-05-28 サーバ変更 (m-ac.jp)

著者・サーバ運営 宮下英明

サーバ m-ac.jp

<http://m-ac.jp/>

m@m-ac.jp
